

2020/06/28

ヨハネの福音書 講解メッセージ④

「あなたは何を求めていますか？」ヨハネ 1:35-51

■「来なさい。そうすればわかります。」

「その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊」と言った。ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか。」(ヨハネ 1:35-38)

「あなたは何を求めているのか」とイエス様が聞いておられるのに対して、弟子たちは見当違いな返答をしています。これは、自分が何を求めて生きているのか、人間にはわからないということを表しています。自分は何を求めて生きているのか、何のために生きているのか、いくら考えても正解がわからず、いつの間にか考えることをやめ、日々の生活に生きることにした人がなんと多いことでしょう。でも、皆、本当は知りたいはずです。

結論から言えば、人は神を慕い求めています。神は愛です。三位一体の神は一つです。ですから、人間は愛を求め、人と調和することを求めます。それは、私達が神のいのちを持っているからです。

調和を求めているのに、なぜケンカしたり、怒ったりするのでしょうか。それは、一つになろうとして相手に同質であることを求め、条件をつけるからです。水と油は一つになれないように、異質のもの一つになることはできません。そこで、相手の価値を上げたり下げたりするために、さまざまな条件をつけます。そして、相手が自分の条件に答えられなかったり、相手の出した条件に自分が答えられなかったりすると、怒りが生じるのです。

「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:34)

目に見えない神を求めても得られないため、人は一つになろうとする相手を人に変え、人と結びつこうとしました。しかし、神は私たちと結びつくために、無条件で私たちを受け入れてくださる方であるのに対して、人は条件を使ってうわべで結びつこうとするために、なかなかうまくいきません。そんな私たちをイエス様は、「自分が何をしているのかわからないでいる」と言われました。

神は永遠であり自由であるお方です。それは、時間にも空間にも左右されないということです。しかし、この世界には「時間」があり、「空間」が存在しますから、この地上で神を認識することはできないのです。この地上では誰も同時に別の場所に存在することなどできま

せんが、神は、すべての人のうちに同時に住むことがおできになります。聖書は「神は昨日も今日もいつまでも変わらない」と教えていますが、私たちにはそれがわかりません。

つまり、人は神によって造られ、神のいのちの土台を持っていて、神を知っているのに、神が認識できないのです。この状態を「死」と言います。神を求める思いを満たす価値を「死の世界」で見出そうとするため、人間の間にはトラブルが絶えないのです。

「イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らがついて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちの一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った」と言った。」(ヨハネ 1:39-41)

イエス様が「来なさい。そうすればわかります。」と言ったのは、二重の意味での答えです。どこに泊まるか、そして、あなたが何を求めているのか、「ついてくればわかる。」と言われたのです。こうして、イエス様についていったアンデレは、「この方こそ、自分が待望している救い主だ」ということがわかったのです。人は、何を求めて生きているのか、自分ではわかりません。その答えがほしければ、神のことばを信じて、ただついていだけてはなりません。神は、時間・空間の外におられる方ですから、理性で神を知ることはできないのです。

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」(I コリント 1:21)

人間の知恵で神を知ることができないのは、神の知恵によることです。神を知る道は理性や学問ではなく信仰なのです。

神は「来なさい。そうすればわかります。」「私についてきなさい」とあなたを招いておられます。神が自分に何をさせたいと思っておられるのか、わからないことにぶつかったら、聖書の言葉を信じて実行するしかありません。そうすれば必ず見つかります。永遠や自由を理解できない私たちの理性ではわかりませんが、神はそこにおられます。

■神の見立て

「彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします。」(ヨハネ 1:42)

イエス様は、シモンをペテロと呼ぶことにしました。これは、神には神の見立てがあるということを表しています。神の見立てと人の見方は違います。あなたはどちらを信じて生きていますか。神の見立てよりも、人の評価を気にして生きてはいないでしょうか。

では神はあなたをどのように見立てているのでしょうか。それを知るために重要な聖書箇所はどこかと問われたら、私はこの御言葉を挙げます。

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。」(創世記 1:31)

「非常に良かった」——これが、人に対する神の見立てです。なぜなら、人は神と同じいのちを持っているからです。

「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)

私たちのいのちは、神のいのちが貸し出されたものです。つまり、私たちは神の一部なのです。ですから、私たちは当然良きものであり、神に愛されています。ところが、「死」によって神が見えなくなったことにより、人は神に愛されていることがわからなくなりました。愛されているかどうかわからない……この不安が、さまざまな罪を犯す源です。こうして人は、罪を犯す自分が良いものであるはずがないと、自分が良きものであることを否定し、神の見立てを否定して生きています。

しかし、本来は良きものなのに、今は違うというなら、それは病気か故障です。つまり、罪は人の本質ではなく、病気なのです。イエス様は、そう教えています。私たちは罪を犯した人を責めたり裁いたりしてしましますが、病気を責めたり裁いたりしても意味がありません。もとの健康な状態に戻るように、互いに励ましあうべきです。

神は人を良きものと見立てているというところから出発しなければ、正しい福音は見えてきません。良きものに対して腹を立てるのはおかしいことです。良きものなのに、自分で何をしているのかわからなくなってしまうのです。「早くわかるようになればいいのに」という思いが変われば、人への対応の仕方も変わってきます。

■さらに大きなことを見る

「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて「わたしに従って来なさい」と言われた。ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。」(ヨハネ 1:43-44)

次にイエス様が声をかけた弟子はピリポです。ここでも、自分の力で神を知ることはでき

ず、神の側から私たちに呼びかけてくださり、応答することによって救われるという基本をみることができます。今も、神は聖書を通し、あるいは心に願いを起こすことを通して、私たちに語りかけてくださっています。神の呼びかけに耳を済ませましょう。

「彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」
(ヨハネ 1:45-47)

「本当のイスラエル人」とは、まことに神のことばを信じる人の象徴です。

この時、イエス様はまだ会話もしていないナタナエルを直観で判断なさいました。神は全知全能ですから、それができても不思議ではありません。これが人の場合だったら、まず「〇〇はこうあるべきだ」と定義を決め、その枠にはまっているかどうか、その条件をクリアしているかどうかを確認したうえで人を判断するものです。この判断には時間がかかります。

しかし、実は人も直観で判断することができます。図形を見たときに、「これは丸だ」「これは三角だ」と判断するのは直観であって、いちいち定義に合っているかどうか検証したりはしません。あるいは、走ってくる車の前に飛び出しそうな子どもを見つけたら、「あぶない！」ととっさに判断します。

なぜ、このように、いちいちプロセスを踏んで考察しなくても判断できるのでしょうか。それは、私たちがもともと答えを知っているのです。それに近いものをとっさに判断できるのだ、このような神と同じ仕組みを持っているのは、私たちの中に神がおられ、答えを教えてくださいからだと、ソクラテス、プラトン、アリストテレスといった哲学者達は、長い時間をかけて結論付けました。だから、人は誰もが善悪の概念を持ち、直観で判断することができるのです。

特別な宗教を持っていない人であっても、「黙祷」と言われると自然と頭を垂れ、祈りの姿勢を取ります。それもまた、私たちの中に神がおられることの表れです。何に祈るのか、深く考えることをしなくても、直観で「祈る」ということがわかるのです。

「ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」(ヨハネ 1:48-49)

私たちは神によって造られたので、神が私たちを知っているのは当然ですが、ナタナエルは不思議に思いました。そして、イエス様の答えを聞いたナタナエルは、信仰告白に至ります。ここにも、神が教え、人が告白するという原則を見ることができます。

「神の子」とは、三位一体の親密さを表す表現であり、父と子と聖霊は同格の神です。異端、特にエホバの証人は、神はおひとりなのだから、イエスは神ではない、神の子は被造物であると教えます。しかし、聖書が私たちに教えている神の名はイエスであってエホバではありません。羊の子が羊であり、サルの子がサルであるように、神の子は神です。

「イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることとなります。」そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」(ヨハネ 1:50-51)

私たちは、イエスがキリストであることを信じ告白して救われました。しかし、それで終わりではありません。始まりなのです。イエス様は「さらに大きなことを見る」と、これからいろいろな奇跡を体験することを示しておられます。「御使いたちが上り下りするのを見る」とは、もっと大きな神の奇跡を知るようになるから、イエスが神だと信じるだけで満足することなく、神があなたを助けることを期待しなさいと教えておられるのです。

あなたもまことの弟子になり、信じただけで満足せず、神は奇跡の神であり、あなたを必ず助けてくれることを大いに主に期待して祈りましょう。それぞれ抱えている問題は違いますが、神はかならずなんとかしてくださいますから、期待しましょう。